

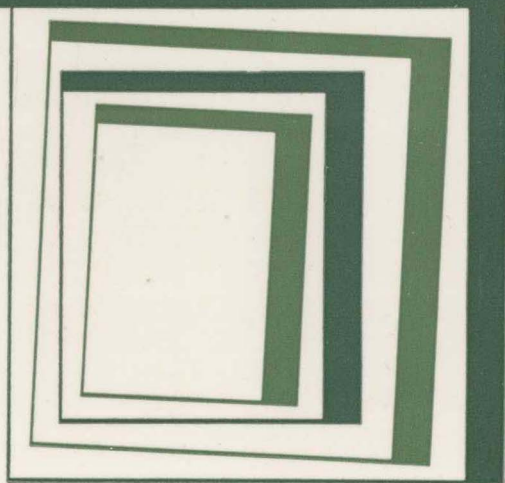
遊部 久蔵 小林 昇 杉原 四郎 古沢 友吉 編

講座 経済学史

II

編集者代表 杉原 四郎

古典派経済学の形成と発展



同文館

遊部 久蔵 小林 昇 杉原 四郎 古沢 友吉 編

講座 経済学史

II

編集者代表 杉原 四郎

古典派経済学の形成と発展

同文館

〈編集者紹介〉

杉原 四郎

1920年 京都に生まれる

1941年 京都大学経済学部卒業
京都大学助手，兵庫県立医科大学予科教授，
関西大学教授を経て

現在 甲南大学経済学部教授，経済学博士

主著 『ミルとマルクス』(1957年，ミネルヴァ書房)
『マルクス経済学の形成』(1964年，未来社)
『マルクス・エンゲルス文献抄』(1972年，未
来社)

『経済原論Ⅰ—「経済学批判」序説—』(1973
年，同文館)

昭和51年6月25日 初版発行

昭和52年11月10日 4版発行

昭和53年3月31日 5版発行

昭和54年3月25日 6版発行

昭和55年10月15日 7版発行

《検印省略》

略称—経済学史Ⅱ

『講座 経済学史』

Ⅰ 古典派経済学の形成と発展

編集者 杉原四郎

発行者 中島朝彦

発行所 同文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町1-41 〒101

電話(東京)294-1801～6 振替東京0-42935

© S. Sugihara

印刷：藤本綜合

製本：トキワ

Printed in Japan 1976

『講座 経済学史』の刊行にあたって

近年、わが国の経済学史研究上の成果にはきわめて注目すべきものがあり、ひろく多角的・専門的な諸業績が数多く公表されている。しかしこんにち、大きく経済学史の全体像を——とりわけ、初学者をも対象として——的確かつ平易にうきぼりにするという点では、いまだかならずしも満足しうる状況にはおかれていないものがあるように思われる。そこで私たちは、版元・同文館からの要請にもとづき、ここに先人・先達の研究諸成果をできるだけ批判的・内在的に継承・発展させるという基本的姿勢のうえにたって、本講座の編集・刊行を意図することになった。

もとより、国の内外にわたって膨大な諸文献を整理・点検し、高度の学問的水準を保ちながらも、平明な叙述で経済学史の鳥瞰図を描き出すということは、けっして容易な作業ではない。だが、幸い、経済学史上の様々な専門領域にわたって、学界各位のご協力とご鞭撻をえることにより、この講座が多少なりとも所期の目的を達成することができれば、私たちの喜びはこれにすぎるものはない。

なお、本年は、アダム・スミス『諸国民の富』（1776年）の発刊200年にあたっている。そして、これを記念するいろいろな集いや出版が世界・各地で企画実現されているようである。といって、こうした記念行事に安易にあやかるとも思えないが、本講座がそれなりに、アダム・スミスにたいするささやかな一モニュメントとしての意味あいをもつことがゆるされるならば、これまた私たちの望外の幸せである。

1976年6月

『講座 経済学史』責任編集者

遊部久蔵 小林 昇 杉原四郎 古沢友吉

目 次

序 説 古典学派とはなにか	3
1 本書の課題と構成	(3)
2 経済学誕生の条件	(5)
3 古典学派の成立	(6)
4 古典学派の発展	(9)
5 古典学派の変容	(11)
第1部 古典学派の現実的基礎	
——1760年代から1860年代へ——	15
第1章 はじめに	15
第2章 スミスとアメリカ革命	21
第3章 産業革命・フランス革命・ナポレオン戦争	
——リカードとマルサスの時代——	29
第4章 1840年代の構造——ミルとリストの世界——	39
第5章 世界市場の現実化と世界史の成立	
——1850, 60年代の世界——	51
第2部 古典学派の確立	63
第1章 古典学派の体系的基礎	
——アダム・スミスの政治経済学——	63
序 説 『国富論』の論証課題	63
第1節 分業と価値	70
1 分業と国富	(70)

2	労働価値説とその混乱	(72)
3	資本主義の発展と労働者階級	(75)
第2節	資本蓄積と分業構造	80
1	スミスの資本認識	(80)
2	資本蓄積と生産的労働	(81)
3	生産的労働と産業構造	(84)
第3節	資本蓄積と近代的市民法	86
第4節	資本蓄積と自由貿易政策	91
1	貿易政策分析の課題	(91)
2	重商主義政策批判と自由貿易政策	(93)
3	自由貿易の必然性	(94)
第5節	資本蓄積と国家財政	98
む す び		104
第2章	古典学派の理論的展開	
	——マルサスとリカードウ——	106
第1節	マルサス＝リカードウ間の穀物法論争	109
1	マルサスの農工均衡発展観と地代把握	(109)
2	リカードウの『利潤論』	(112)
3	リカードウ価値論の確立	(114)
第2節	リカードウ体系の理論構造	116
1	価値論	(117)
2	地代論	(124)
3	自然・市場価格論	(128)
4	賃金論	(129)
5	利潤論	(131)
6	外国貿易論	(134)
7	資本蓄積の諸問題	(136)
第3節	「対抗理論」としてのマルサス経済学	140
1	マルサス経済学の方法と課題	(140)
2	富と生産的労働	(142)
3	価値論	(144)
4	地代論	(150)

5 賃金論 (151)	
6 利潤論 (152)	
7 富増進論 = その十分条件としての有効需要論 (154)	
むすび——古典派経済学の崩壊——	160
第3章 古典学派とフランス	165
第1節 『国富論』とフランス	165
1 『国富論』と保護主義者 (165)	
2 『国富論』とセーおよびシスモンディ (166)	
3 『国富論』とサン・シモン (168)	
第2節 ジャン・バティスト・セー	170
1 方法——事実の観察—— (170)	
2 資本蓄積論 (172)	
3 販路説 (175)	
4 価値論 (179)	
5 所得論 (182)	
第3節 シモン・ド・ド・シスモンディ	185
1 『経済学新原理』とイギリス古典学派 (185)	
2 資本と所得 (187)	
3 再生産論 (190)	
4 恐慌論 (194)	
5 「保護的権力」の要請 (197)	
第4章 古典学派の思想的変貌——J. S. ミルの経済学——	199
第1節 経済学と社会哲学の結合——ミル経済学の目標——	199
1 ミル経済学のねらい (199)	
2 経済学的方法論的再構成 (202)	
第2節 私的所有と社会主義——ミル経済学の基本的立場——	207
1 生産と分配の峻別 (207)	
2 ミルの所有論 (208)	
第3節 ミル経済理論の構成	213
1 生産論 (213)	
2 分配論 (216)	

3 交換論としての価値論 (219)	
4 資本蓄積と利潤率低下, 恐慌, 停止状態 (223)	
むすび——過渡期の経済学者ミル——	227
文献案内	231
人名索引	237

『講座 経済学史』

Ⅱ 古典派経済学の形成と発展

序 説 古典学派とはなにか

1 本書の課題と構成

古典学派 (Classical school, Classical political economy) は、経済学の歴史のなかに現れてきたいろいろな学派のなかの一つである。だがたんなる一つにすぎないものではなく、それ以上の意味をもつ、特別の一つである。

古典学派に先立つ学派には、本講座の第1巻でとりあげられる重商主義や重農学派があり、古典学派につづくものとしては、本講座の第3～5巻で論ぜられるマルクス経済学や歴史学派や近代経済学などがある。古典学派はこうした諸学派のなかの一つなのだが、それがとくに「古典」学派とよばれて特別の地位を与えられているのは、第一に、この学派の形成を通じてはじめて、経済学が科学としての確固たる地位を占めることができたということ、第二に、それ以降の諸学派は、これに賛成しようと反対しようと、すべて古典学派を共通の基盤として、そこから出発しなくてはならなかったということによる。

それではどうして古典学派は、経済学史のうでこのような特別の地位を占めているのであろうか。だがそれを考えるまえに、一般に学派とその変遷について少しのべておかなくてはならない。

(イ) 学問の歴史において新しい学派が登場する場合は、まず従来の学派のいずれにも満足できない人によって新しい学説が提出され、つぎに諸学派との間の論争を通じて、それが多くの人々の賛同と協力を獲得しつつ、一つの理論体系に発展し、その結果学界に確固たる地位を築き上げる、というコースをとる。

(ロ) こうした新学派は、旧学派との対決と論争とによるその批判的克服によって成立するのだが、注意しなければならないのは、学問的批判にはいつも否定と継承との二面があるということである。学問の世界では、従来の学説がすべて否定されてまったく新しい学説が生まれるというようなことはありえない。批判とは、旧来の学説のなかにもすでに不完全なかたちで存在していたものを、そのの

制約を除去しながらとりだして、新しい観点から活用するという作業である。旧学説の破壊と同時にそれからの摂取のうえに新学説が打ち立てられてはじめて、真の意味の学問的進歩が実現するであろう。

(イ) 経済学は、数学や論理学とちがって、現実の世界を対象とするものであり、しかも自然科学のばあいとちがって、対象そのものの不断の歴史的な展開が新しい問題を生みだし、理論にその解決をせまってくる。現実の展開が同質的な枠組みのなかでのものにとどまるかぎり、これまでの学派の理論で処理できるが、その枠をはみ出るような異質的な諸現象が起ってくると、そうした現象をも包摂できるような新しい観点が必要となる。いろいろの試論が提出されて学界の定説に挑戦する。そしてそれがやがて学派の変遷につながる。こうして(イ)と(ロ)とでのべた学問の歴史と現実の歴史とは、密接な関係をもっているのである。

(ロ) 異質的な現象をも包摂しうる新しい観点を打ち立てるためには経済学は、これまでその理論的枠組みにとって自明のものとされていた根本前提や基礎概念そのものを、改めて吟味しなおさなければならない。それはやがて人間にとっての経済の意味という問題にまでゆきつくことになるであろう。こうして経済学は、一定の仮説のうえに立てられた分析の武器をみがき上げてゆく連続的進歩の段階から、分析そのものの意義を人間・社会・歴史という大きな関連のなかで問い直すという飛躍と転換の段階に直面することになるのであって、新しい学派の形成は、この段階を成功裡にくぐりぬけてはじめて、可能になるといってよいだろう。

この序説では以下こうした諸点を念頭におきながら、古典学派の特質をその生成と発展に即して考えてゆくのだが、まず最初に、古典学派という規定に関連させながら本書の構成について一言しておこう。

一口に古典学派といっても、その名でよばれる学派の範囲について、具体的にはどの学者をそれに入れて考えるかについては、学史研究者の意見が必ずしも完全に一致しているわけではない。だが一般的には、アダム・スミス (Adam Smith, 1723-90) によって創設され、リカードウ (David Ricardo, 1772-1823) やマルサス (Thomas Robert Malthus, 1766-1834) によって発展させられ、J. S. ミル (John Stuart Mill, 1806-73) によって再編成されたところの、イギリスを中心に

形成されたもので、18世紀から約1世紀のあいだ、経済学の主流として国際的にも大きな影響をおよぼした学派だとされている。本書でもこの通説にしたがって、第2部の第1章でスミス、第2章でリカードとマルサス、そして第4章でJ.S. ミルをというふうに、上記の4人のイギリスの学者の業績に焦点をおいて概説するのだが、忘れてはならないのは、この学派の形成にフランスのかかわるところが非常に大きかったということである。このことは、たとえばスミスが『国富論』を書くうえにケネー (François Quesnay, 1694-1774) などフランスの経済学者たちと直接接触したことが重要な意義をもったこと、リカードやマルサスが当時のフランスの代表的な経済学者だったセー (Jean Baptiste Say, 1767-1832) と親交があり、セーはかれらがロンドンで1821年につくった「経済学クラブ」(Political Economy Club) の例外的な外国人会員だったことや、J.S. ミルがサン・シモン主義者をはじめ多くのフランスの人々から強い影響を受けつつその思想を形成していったこと、などを考えてもわかるであろう。このかかわりを見るために本書でとくに一章を設けた(第2部第3章「古典学派とフランス」)のもそのためである。

2 経済学誕生の条件

ところで、社会の富のごく一部が商品として生産され交換されているかぎり、経済学という独立した学問が生れてくるはずはない。商品経済が封建社会の封鎖性、自給性、分散性をくずしつつ広がってゆき、個人の自由な活動によっておのずからおりなされる市場的分業体系が広く深く形成されてはじめて、その体系を支配する法則を究明する学問の生れる条件がととのう、というのはこうである。第一に、商品経済は、個々人の自由な行動の社会的関連の結果としてなりたちながらも、個々人の意識とは独立した、いわば第二の自然という性質をもっていて、それに内在する論理にしたがって自律的に運動するとともに、それまでの経済が政治や宗教と深いかかわりをもって成立していたのとちがって、経済の世界が人間の他の生活領域から独立し、自己完結的な体系をもつようになるので、これを一つの研究対象としてとりあつかうことができるようになる。第二に、人間がこのような商品経済のなかで、たんに受動的、無自覚的に生きてゆくのではなく、

個人も社会とともに発展するような途を歩もうと思うなら、あたかも自然科学の成果を技術開発に生かしてはじめて近代的な生産力が発揮できるように、市場経済の、あるいはそれがもっとも発展した形である資本主義的経済の法則を精確に把握することがどうしても必要となるであろう。このような可能性と必要性とが資本主義の成立と同時に経済学という学問を生みだすことになったわけである。

だがこうした新しい社会体系の形成は、たんに経済構造のなかでの変化だけではなく、社会全体の政治的な編成替えやそれらにともなう新しい人間の生活様式の誕生なしには不可能であろう。だとすれば、17世紀に他の諸国に先駆けて市民革命を遂行し、エンクロージャー運動によって農村の近代化を徹底的にもたらすとともに、産業革命によって工場制機械工業を普及させ、19世紀の中期までに産業ブルジョアジーの支配的地位を確立したイギリスが主となり、大革命とそれにつづくナポレオン戦争期を通じて絶対主義的アンシャン・レジームを打倒し、イギリスには遅れはしたものの大陸では最初に政治経済の近代化に成功したフランスが従となって、古典学派を形成したことは当然であった。本書の第1部「古典学派の現実的基礎」は、このような古典学派を生みだした現実的諸条件と、それがどのような実践的課題を経済学という学問に与えたかということを、1760年代から1860年代までのヨーロッパ経済史について説明し、上記の(4)で指摘した経済学史と経済史とのあいだの関連を通じて、古典学派の特質を浮び上がらせようとするものである。

3 古典学派の成立

古典学派の基礎をすえたスミスの『国富論』が北アメリカの独立と同年の1776年に公刊されたことは興味深い。『国富論』は近世初期以来ヨーロッパ諸国を支配してきた重商主義政策を理論的に批判するという意図で書かれたものであるが、植民地アメリカの独立は、第一次イギリス帝国を崩壊させ、重商主義政策が今や転換せざるをえなくなったことを、事実をもって示したものであったからである。重商主義は中央集権的な国家が強力な統制をもって、主として外国貿易で流入する貨幣を基礎に、資本主義経済体制を強力に創出してゆくための政策であって、

いわゆる資本の本源の蓄積過程の時代に各国で実施されるものである。したがってこの政策をめぐる論義は16世紀以来ヨーロッパ各国で見られるが、それがとくに活発になるのは市民革命後のイギリスにおいてであった。イギリスでは重商主義政策と資本主義とが早くから強く結合していたのみならず、議会政治のもとでの政策推進は世論に訴える必要があったからである。この時代に出されたおびただしい文献のなかで代表的なものの一つは、東インド会社の重役トーマス・マン(Thomas Mun, 1571-1641)の『外国貿易によるイギリスの財宝』(1664)であるが、この書物の標題が示しているように、マンは富を財宝(金銀)としてとらえ、それをイギリスにもたらすものは外国貿易だとし、それをより多くもたらすためには東インド会社のような特権的重商資本への国家の保護が必要だとしているのだが、こうした主張にたいしては、イギリスにおける資本主義の発展とともに、漸次批判的な見解が表明されるようになってきた。富の源泉は外国ではなく国内に、流通ではなく生産に求めるべきだとする主張、経済活動の統制よりはむしろ自由をのぞむ志向がそれであって、18世紀に入ると保護されるべきは対外商業ではなく国内産業であり、商権の拡大より生産力の育成こそ国富増進の根本だという主張が強まってくるとともに、経済認識もまた、生産と流通、国内と国外、貨幣と実物といった諸側面を全体として総合的にとらえようとするひろがりをもってくるようになるのである。

ところで重商主義にたいする批判は、イギリスにとどまらず、宰相コルベール(Jean Baptiste Colbert, 1619-85)が強力に重商主義政策を実施してきたフランスでも起ってきた。ケネーを中心とする重農学派の人々がそれである。かれらはコルベール主義が、輸出を促進するために穀物価格を人為的に押し下げ、国内農業の犠牲において貿易差額を大きくしようとするのは誤りで、富の真の源泉は農業であり、その農業の近代的生産力を高めるためには、経済活動の統制を撤廃して自由放任政策をとるべきだと主張する。こうした提言を基礎づけるためにケネーは、一国の経済構造のメカニズムを一枚の図表で説明する『経済表』(1758)を作成し、経済の全体的把握に大きな理論的貢献をのこした。さきにもふれたように、スミスもこの点にふかく学ぶところがあったのだが、ただ重農学派の場合は、経

済分析の重点を流通過程から生産と再生産の過程に移したという点で重商主義から大きく前進したとはいえ、その認識はなおフランスの政治と経済の前近代性に制約されていた。純生産物 (produit net) という剰余を生みだすのは農業のみで工業は不生産的だとして、社会的剰余のかなめを利潤としてではなく地代としてとらえていたり、拡大再生産ないし蓄積の認識が不足したりしているのはそのあらわれである。そしてこのようなケネーの経済思想の根底には、人間は神の恩寵によって自然のめぐみにあずかるのだという神学的世界観が横たわっていた。

スミスによれば、重商主義と重農主義との二つの学派は、ともに資本主義体制のもとで十分に発展した商品経済を理論的に把握することはできない。かれはこの両者から、また18世紀に入って種々の形で見られるようになった自由主義的経済論から多くを学びながらもそれらを乗り越え、重商主義政策批判という時論的課題にたいし、資本主義経済のより包括的体系的認識という理論的前進をもって答えようとしたのだが、この場合かれが『国富論』を書くまえに『道徳感情論』(1759)を公刊していたという事実が、前述の(≡)との関連で注目されなくてはならない。スミスがこの労作で明らかにしたことは、私的な利益を自由に追求しながら生きてゆく個人の集団からなる市民社会が、国家統制を無用とする「自然的自由」の体制のままで、どうして「万人の万人にたいする戦い」の修羅場に墮落することをまぬかれうるのかということであった。スミスはその課題を、「私悪即公益」といいたマンデヴィル (Bernard Mandeville, 1670-1733) や人間の利他心に社会的コミュニケーションの支持を求めるハチソン (Francis Hutcheson, 1694-1746) らを吟味しつつ、市民社会においては、「同感」を基軸とする新しい人間の相互連関を通じて、私利の追求がおのずから公益に合致し、富への道が同時に徳への道でもありうることを明らかにすることによって、解決しようとしたのである。スミスのこのような社会観と人間観は、ヒューム (David Hume, 1711-76) やファーガスン (Adam Ferguson, 1723-1816) らスコットランド歴史学派の人々に共通する市民社会形成史論——これはかれの『グラスゴー大学講義』(1763)にもうかがわれる——とともに、かれの経済学に大きなヴィジョンを与え、新しい社会科学の創設を可能ならしめた。たしかにスミスの世界観にも見えざる手によって予

定調和をもたらず神のすがたはある。だがそれはケネーの神よりも人間化され合理化され、人間の主体的な行動に媒介されてはじめてその摂理をこの世で実現することのできる神となった。

『国富論』はスミスの生前に5版を出すほど大きな反響をよび、ドイツ語やフランス語にも翻訳されて大陸諸国にも広がった。『国富論』の少し前に刊行されたステュアート (James Steuart, 1712-80) の『経済学原理』(1767) がほとんど顧みられぬまま忘れ去られたのとまことに対照的である。これは、『経済学原理』が重商主義政策の理論的総括という基本性格をもっていたのになし、『国富論』が、資本主義の新しい段階、すなわちもはや本源的蓄積過程を脱却して自立的な発展をなしうるほどに成熟した段階の現実を認識した理論体系であったことによるといつてよい。

4 古典学派の発展

とはいうものの、『国富論』の資本主義認識にはなお未熟さや混乱が残っていて、スミスもまた産業革命以前の初期資本主義の現実からの制約を完全には脱却していないことを示している。そしてこの点は、スミスの死後、本格的に進行する産業革命にともなう社会経済構造の急速かつ大規模な変化のなかで生まれてくる諸問題ととりくみながら、スミスの敷いた軌道のうえで新しい現実を処理する理論をきたえてゆこうとする人々の努力によって克服されていった。そのなかの代表的な二人がマルサスとリカードウであって、かれらの経済学が相ついでまとめられる1820年ごろ(リカードウの『経済学原理』は1817年(同第3版1821年)に、マルサスのそれは1820年に出了)には、古典学派は学派としての基礎をかためることができた。その頃スコットランドからロンドンに移ってきて、リカードウに協力したJ. ミル (James Mill, 1773-1836) やマカロック (John Ramsay McCulloch, 1789-1864) も、この学派の普及にあずかって力があつた。

ロンドンの株式仲買人の子に生れ、父と同じ職業で産をなしたリカードウと、ケンブリッジ大学を出て僧職につき、後経済学の教授となつたマルサスとは、その経歴がちがうように経済学の考え方も決して同じではなかつた。価値論では